

学部時代に学んだ調査技法

武内 清

敬愛大学国際学部 特任教授

私が学んだ東京大学教養学部の教育社会学コースでは、3年次に「教育調査演習」という必修の授業があり、だれもがこれを経験して卒業してゆく。この授業が学部時代の授業の一番の思い出という卒業生も少なくない。

授業の1コマながら、調査テーマの設定、仮説の構築、調査票の作成、サンプリング、実査、データ集計、分析、報告書の作成、発表（5月祭での発表や冊子の作成）と、社会調査のひととおりのことをぜんぶする。自分たちの手で行うので、調査の全容がわかる。たいへんな苦労と時間を費やすもののだが、その後、職場で役にたっているという卒業生も多いように思う。

私の学部生時代は同期6人で、勤労青少年の面接調査を茨城県古河市で行った。面接は、中卒で集団就職して働いている勤労青少年を職場に訪ね、彼らの上司の目を気にしながら、職場満足度や勤労意欲等について尋ねた。聞き逃した項目があると「再度訪問せよ」という命令が指導教官より下り、実地調査のきびしさを学んだ。回答を1枚のカードに写し、それをならべて集計した。そこで縦横にならべるクロス集計という手法も覚えた。1票が大きな重みもっていた。

後輩たちの「教育調査演習」のテーマは、児童・生徒やその親あるいは大学生を対象にすることが多くなり、その手法も面接調査からアンケート調査に移り、大量のデータをコンピュータで処理するようになった。

集計は大型計算機センターがつかわれ、しかも自分のパソコンでSPSS（予測分析ソフトウェア）という便利なソフトで集計、検定ができるようになっていった。ただ、楽になったぶん、データや集計の重みを軽く考えるようになってしまったように思う。むかしはクロス集計1つ出すだけでもたいへんだった。縦横に調査票を並べ、数をカウントし、検定も手計算で行い、とても手間がかかった。

私の場合は、その後、東京都子ども基本調査、日米

高校生比較調査（日本青少年研究所）、モノグラフ・高校生調査（ベネッセ）、大学生文化調査（科研）など、量的アンケート調査に多く関わってきた。

東京都子ども基本調査では、3年ごとに8回実施し、子どもと親をペアにしてどのような親からどのような子どもが育つかをデータで明らかにした。日米高校生比較調査は「アメリカ=バラ色/日本=灰色」という対比の結果が鮮やかに出たが、ことば（翻訳）の問題が最後まで残った。モノグラフ・高校生調査は年3回実施し、四半世紀にわたり、高校（生）のさまざまな側面をテーマにし、明らかにした。大学生文化調査では経年比較で、大学の「学校化」、学生の「生徒化」がデータから明らかになった。

調査の手法は、私たちの時代から大きく進歩している。むかしの世代から何か言うのは時代錯誤のような気もするが、大切に思ってきたことを書き留めておこう。

第一に、たんなる実態を明らかにする記述的な調査ではなく、何のために役だつのかを考えた仮説的（説明的）な調査をすべきであろう。そのさい、因果法則を満たす3つの条件は、必須である（時間的順序、変数の共変、第三の変数の統制——高根正昭『創造の方法学』講談社現代新書、1979年）。

第二に、実在の人間を念頭におくべきである。現代は、複雑な多変量分析から自由回答の分類までコンピュータがやってくれて、高度な解析ができる。しかし、最初に質問に答えるのは生身の人間であり、その肌触りがわかるような分析や考察をすべきであろう。そのためには、調査の初心に返り、質問のしかた（ワーディング）、クロス集計といった初歩的な部分も大切にしたい。

第三に、量的調査と質的調査を併用して、現実に迫るべきであろう。そして、出てきたデータが自分の経験や感覚とちがうときは、まずデータや集計を疑い、再点検をすべきであろう。実証はだいじだが、データ至上主義に陥ってはならない。



Column
社会調査
の
あれこれ

調査断章

青木秀男

特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所 所長

「**雑**踏にうづくまる野宿者の一滴の涙に気づかない社会(科)学にいったい何ができようか」(『寄せ場労働者の生と死』1989年)。私は、かつてこう書いた。他者を批判することばは、いつも自分に跳ね返る。私はその後も、都市底辺を徘徊してきた。日雇労働者、下層外国人、野宿者、マニラのスクオッター(Informal Settlement)、雑業労働者、ホームレス。かの問いは、いまでも横にある。

調査には3つの問題がある。データをどう集めるか(方法の問題)、データをどう読むか(解釈の問題)、調査対象者とどう接するか(関係の問題)。ここはエッセイなので、その議論は行わない。その前にだいたいな問いがある。何のための調査か。問いは続く。何のための研究か。何を知りたいか。それはなぜか。調査はどう役だつたか。調査のたびに、これらの問いへ回帰する。

調査は、現実を知る武器である。現実、人間への非道に満ちている。非道は、しばしば隠蔽される。調査は、現実を分析し、非道を暴き、問題を発見する。発見は、変革への第一歩である。知ることは、超えることである。

私は不遜にも、現象学的社会学であれ何であれ、問題を見ていないと書いた(『社会学評論』33巻4号)。赤面の至りである。とはいえ、じっさいはどうか。調査は、非道を暴き、問題を発見したか。そして、超克の道を示したか。その問いは、私自身を問うている。

貧民病院。初期処置はするが、薬を買えない人は放置する。「集中治療」室で、痩せた少年が昏睡し、かよい息をする。細い腕に点滴の針が刺さる。兄と姉が交代で、ゴム袋を絞って、喉元へ空気を送る。母が、紫の口元を拭う。父が、涙目で見つめる。次の日、私の援助で、人工呼吸器を装着する。息子の命

が延びたと、父が喜ぶ。しかし、少年の額に汗の粒が滴り、手足がむくみ、腹に黄疸が出る。そして翌朝、少年はしずかに逝った。父が泣き、母が泣き、兄が泣き、姉が泣く。少年の骸に取り纏る。しかし、少年は帰らない。路上で生まれた7歳の命が絶えた。

少年は、どんな夢を奪われ、何を悔やんで、一人旅立ったのか。前日には、隣のベッドの少年が逝った。そうではない。少年は殺された。そこは戦場である。夢を膨らませ、貧しさと戦った少年が、敵の銃弾に斃れた。可憐な命をだれが戦場へ送ったか。

昨年7月の、マニラでの出来事である。過酷な現実には愕然とする。しかし、調査は逡巡しない。少年、父、母、兄、姉の声と表情と仕草を観察する。こみあげる怒りを抑えて、冷徹に観察する。そして考える。なぜ少年は死んだ。なぜ少年は路上で生まれた。なぜ家族は貧しい。どうして生き延びる。なぜ同類の人が多。問いが連なり、答えが重なる。そして現実の輪郭が、徐々に浮き上がる。

とはいえ、現実超克の道はまだ遠い。……これが、私の調査実感である。なぜ都市底辺の人びとと聞かれる。答えは明瞭である。都市底辺から都市が見える。世界が見える。懸命な生の人間が見える。悲嘆と喜びが見える。不幸と幸福が見える。

これを固くいえば、構造と意味となろうか。調査は、構造と意味に分け入る。そして社会の非道を暴く。その人間的意味を捉える。そのまた意味を考える。調査はそのためにある。……そう念じつつも、耳で声が囁く。おまえに何ができたのか。人びとに何が返せたのか。一瞬心が揺らいでは、思いなおす。その連続である。調査は孤独である。それでも逃げない。調査を止めない。調査は邂逅である。魅入られる人、つながりたい人がいるかぎり。そんな思いで、街を徘徊している。